「シルクロード史観」再考

――森安孝夫氏の批判に関連して――

間野英二

はじめに

一九七〇年代の後半、日本の東洋史学界では、シルクロード（東西陸上交通路）の存在が中央アジアの住民にとってどれほどの意味を持っていたかという問題をめぐって「シルクロード史観論争」と呼ばれるささやかな論争があった。筆者は、この論争のいわば起爆剤ともなった『中央アジアの歴史――草原とオアシスの世界』（新書東洋史八、講談社現代新書、一九七七年）という書物の著者であった。しかし、著者本人としては、この著書で述べたことは当時すでに中央アジア史を専攻する若手研究者の間ではむしろ当然とされていた事であり、そのような考えは、やがてそれら若手研究者の成長と共に、学界の常識となるであろうと信じていた。そのため、筆者は『中央アジアの歴史』出版の直後に「中央アジア史とシルクロード――シルクロード史観との訣別――」（『朝日アジアレビュー』九―一、通巻三三、一九七八年）と題するエッセイを書き、そこで自らの考えをあらためて述べはしたものの、この論争に直接参加する事をしなかった。そのためもあってか、この論争はいわば自然消滅的に終わり、論争についての決着は時の流れにゆだねられた。あれからすでに三〇年の歳月が流れたのである。

筆者は、次の一で述べるように、『中央アジアの歴史』で述べたような考えは、三〇年の歳月を経て、現在、日本の東洋史学界において、ほぼ常識として定着していると考えていた。しかし最近、森安孝夫氏が一般向けながら、『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史五、講談社、二〇〇七年）と題する書物を出版し、その中で森安氏は、かつて松田壽男氏によって提唱され、筆者らが

批判した「シルクロード史観」（これについては、後の三で述べる）の再興をめざして、筆者の考えをくりかえし批判している。

それ故、小論では、森安氏の批判の内容を検討し、それらが一方的なもので、氏の批判にはとうてい従うことができないという筆者の見解を示したい。また、筆者が「シルクロード史観」と呼んだ松田氏の考えと筆者の考えで最も異なる中央アジア・オアシス都市の性格に関する問題についても、現時点であらためて再考し、筆者が現在、それらの問題についてどのよう考えているかを示したい。そして結論的には、「シルクロード史観」に関わる争点については、少なくとも現時点では、筆者の三〇年前の考えを特に改める必要がないと考えていることを示したい。

一

以下の論述に先立って、『中央アジアの歴史』で展開した筆者の考えがどのようなものであったかを、まず確認しておく必要があるであろう。

なお、本稿では「中央アジア」という言葉をしばしば使用する。ただしこの「中央アジア」という言葉は漠然とした言葉である。そのため、広義や狭義など、様々な用法があるが、筆者のいう「中央アジア」とは、『中央アジアの歴史』の他、間野英二編『中央アジア史』（同朋舎、一九九九年）や間野英二・堀川徹編『中央アジアの歴史・社会・文化』（放送大学教育振興会、二〇〇四年）の中にも明記してあるように、東西トルキスタンのオアシス地帯とその北方に広がる草原地帯、それにアフガニスタン北部およびパキスタン北部を含んだ地域を意味する。すなわち、筆者の「中央アジア」はモンゴルやチベットをも含む「広義の中央アジア」、すなわち「内陸アジア」を意味するものではない。以下の記述の前提として、このことをあらかじめ明確にしておきたい。

さて、『中央アジアの歴史』に述べた筆者の考えについては、前掲の『中央アジアの歴史・社会・文化』（二〇〇四年）の「はじめに」の中で、筆者は次のごとく要約しておいた。

今回の（「中央アジアの歴史・社会・文化」に関する）放送の主任講師の一人であり、この「はじめに」を執筆した筆者（＝間野）は一九七七年に『中央アジアの歴史――草原とオアシスの世界』（講談社現代新書）という小著を出版した。この小著は、中央アジアにおける東西陸上交通路（シルクロード）の、中央アジア住民にとっての存在意義を過大視する当時の学界の通説（シルクロード史観）を批判し、主に次のような主張を展開したものであった。

（一）　中央アジア史は、漢文史料などの外国の史料ではなく、中央アジアで、中央アジアの人々によって書き残された、中央アジアの現地語史料を中心に据えて構築されるべきである。

（二）　中央アジア史は、シルクロードを利用しての中央アジアと中国・西アジア・ヨーロッパとの交流（東西の関係）よりも、中央アジア内部に存在した草原の遊牧民とオアシスの定住民の相互関係（南北の関係）を基軸に考察すべきである。

（三）　つまり中央アジアは「シルクロードの世界」としてよりも「草原とオアシスの世界」として把握すべきである。

以上が筆者の主張の要約である。では、当時から三〇年の月日が経過した現在では、あの論争について中央アジア史研究の最前線にある研究者たちはどのように考えているのか。ここでは、近年の二人の研究者の見解を紹介する。

まず、東トルキスタン社会史の専門家である堀直（ほりすなお）氏は、今から一〇年ほど前に、「草原の道」（歴史学研究会編『世界史とは何か　多元的世界の接触の転機』、講座世界史一、東京大学出版会、一九九五年）と題する論文の中で、あの論争を総括して、「この間野の提唱した中央アジア史の構造論は……新しい問題を生んだものの、ほぼ学界に容認され定着している（二九四ページ）」と述べている。

また、中央アジア近現代史の専門家である宇山智彦氏は、七年前に出版された近現代史を中心とする中央アジアの通史、『中央アジアの歴史と現在』（東洋書店、二〇〇〇年）の中で、この論争についてかなり詳しく紹介し、なお残された問題点を指摘したが、結局、「（問題は残るにしても）大筋としては、間野と同世代およびそれ以降の研究者（＝間野と同世代の研究者、および間野の世代以降のより若い世代の研究者）の支持によって、「脱シルクロード論」は事実上勝利した」と述べている。なおここに見える「脱シルクロード論」とは「シルクロード史観」を批判した筆者らの議論を指す。

このような、筆者以外の研究者たちの見解をも参考にして、筆者も『中央アジアの歴史・社会・文化』（二〇〇四年）の中で、筆者の『中央アジアの歴史』に見えるような考えは「現在学界の常識としておおむね定着しているように思われる」（四ページ）と書いた。

ところが、すでに触れたように、最近、森安孝夫氏の『シルクロードと唐帝国』が出版され、その中で森安氏は筆者の考えを何度も批判している。森安氏の批判がどのようなものであるかを示す前に、まず、『中央アジアの歴史』の中で筆者がシルクロードについて自己の考えを述べた部分を引用して示したい。この部分

が森安氏の批判の対象とされていると思われるからである。なお、『中央アジアの歴史』ではシルクロードをシルク・ロードと表記している。

さて、筆者は、この書物の中に「シルク・ロードと正倉院の屏風」という項目を設け、

中央アジアのオアシス都市を結ぶ東西交通路、また中央アジアの草原地帯を通過する東西交通路は、普通、その路を通って運搬された代表的な商品である絹の名をとって、シルク・ロード、すなわち絹の道と呼ばれる。そしてこの道が、地理上の発見によって海上交通路の発達する一五～一六世紀に至るまで、常に東西交通の幹線路であったことには疑問の余地がない（七〇ページ）。

と述べ、まず、シルクロードが「常に東西交通の幹線路であったこと」を確認した後、このシルクロードを通じて行われた文化交流の一例として、イラン学者伊藤義教氏の正倉院所蔵「羊木臈纈屏風（ひつじきろうけちのびょうぶ）」に関する興味深い研究を詳しく紹介して、

ところで、この（正倉院の屏風に見える）羊と、……中央アジアのアフラーシアーブ出土の壁画にみえる、羊の図案を比較してみよう。その類似性はあまりにも明白である。そしてその類似性は、日本・中国とイランという、きわめて遠隔の地の間に存在した中央アジアの東西交渉史上の役割を明確に伝えるものといえよう。

しかしシルク・ロードの存在が、中央アジアの住民たちによって、どの程度意識されていたか。この点についての疑問は、すでに序章において（一六世紀の中央アジア出身の人々によって書かれた二つの歴史書の内容を根拠に）述べたので今は繰り返さない。ただここでは、シルク・ロードが文化の伝播路であると同時に、東西貿易の幹線路でもあったため、その幹線ぞいのオアシスの民の中には、後述するソグド人の如く国際的な商人として活躍する者もあったことを指摘するにとどめよう。ただし、オアシス都市の商人たちの活動の意義を、あまりに過大視することには問題があり、「有名なシルク・ルートの貿易は、オアシスの経済生活のなかに入ってくるというよりは、オアシスを通過するぜいたく品の長距離貿易（正しくは中継貿易）」（オーエン・ラティモア）であったとする見解もあることを、心にとどめておく必要があるであろう」（七四ページ）

と述べた。またシルクロードを利用して展開されたソグド人の国際的な通商活動を紹介した後、

中国人の記録によって、ソグド人たちの商人としての活動にあまりに眼をうばわれて、ソグド地方を中心とする中央アジアの諸オアシス都市を、もっぱら商業都市、隊商基地と規定することは行き過ぎであろう。やはりオアシス都市の基本的な経済は、何よりも農業に依存していたと考えるべきであろう（八九ページ）

と述べた。なお、「中央アジアの諸オアシス都市を、もっぱら商業都市、隊商基地と規定」したのは、後に三に記すように「シルクロード史観」の提唱者である松田壽男氏であった。

これに対して、森安氏は『シルクロードと唐帝国』の中で、筆者、および筆者の考えを支持する研究者たちの考えにつき、

「あえて極端にいえば、これ（＝間野らの議論）は中央アジア史からシルクロードを学問的に抹殺しようという動きである」（七二ページ）

「（間野らによって）ＮＨＫの新旧シルクロード＝シリーズをはじめとするマスコミや出版界の風潮と、本書も含めシルクロードというタイトルを持つ書物にひかれる読者自身の姿勢までもが非難の対象とされているのである」（七三ページ）

「シルクロードによる「東西」貿易にほとんど意義を認めようとしない間野英二」（七三ページ）

「間野の主張の要点を繰り返すと……東西を繋ぐといわれるシルクロード商人などというものに大した意味はな（いというものである）（七四ページ）

と述べている。

以下に、この森安氏の記述について筆者の考えを記したい。まず、森安氏の批判の前半部についてであるが、先に引用した『中央アジアの歴史――草原とオアシスの世界』の記述を素直に読んでいただきたい。「シルク・ロード……が、地理上の発見によって海上交通路の発達する一五～一六世紀に至るまで、常に東西交通の幹線路であったことには疑問の余地がない」とか「シルク・ロードが文化の伝播路であると同時に、東西貿易の幹線路でもあったため」と記した筆者は、たとえ「あえて極端に」いうとしても、「シルクロードを学問的に抹殺しよう」などとしているであろうか。もちろん答えは否である。

このことは、かつて、「シルクロード」を冠した多数の書物の著者として、また松田壽男氏のシルクロード論の継承者として筆者の考えを批判された長沢和俊氏の「間野さんを中心とするグループの人たちが……シルクロードはやめたほうがいいときめつけるんだとしたら問題」という座談会での発言に対して、筆者の

考えを、より学問的な立場から批判された護雅夫氏ですら、「そこまではいっていないんじゃないかな。間野さんがいっていることは、けっきょくシルクロード論は東西交渉史家にまかせろ、ということだと思うんですよ」（『歴史公論』四-一二、一九七八年、三五ページ）と述べていることからも明らかであろう。

事実、筆者は先に挙げた「中央アジア史とシルクロード――シルクロード史観との訣別――」の中でも、「私としてもとより中央アジア史にとってのシルクロードの存在意義を、全面的に否定しようとするものではない。……たしかに、中央アジアの文化史は、シルクロードの存在を抜きにして、それを語ることは不可能である。しかしそれにもかかわらず、それらの東西文化交流に関わりある問題の検討を、私たちはしばらく東西交渉史の専門家の手に委ねたいと思う。そして私たちは、当面、交渉史とは無関係の中央アジア独自の諸問題を検討してゆきたいと思う」（三六ページ）と書き、また「そして……私たちによって、中央アジアで書かれた諸文献の記述を主要な論拠として……一つの中央アジア史像が描き出されるようになった時、私たちは隣接分野の東西交渉史の研究成果によって、私たちの作り上げた中央アジア史の像を仔細に検討してみるであろう。そしてそのような作業が完了した時、中央アジアはその神秘のベールをぬいで、はじめて私たちの前に、その真の姿を現すであろう」（三六ページ）と書いている。どこに「中央アジア史からシルクロードを学問的に抹殺」しようなどという考えが見られるであろうか。森安氏の批判が、先の長沢氏と同様の、曲解に基づく、一方的な批判であることはあまりにも明らかであろう。

なお、長沢氏の発言にある「間野さんを中心とするグループ」などというグループは、当時どこにも存在しなかった。書評などの形で、筆者の考えに賛意を表してくれた研究者は、筆者が把握する限りでも十数名にものぼったが、当時、その人々の間に横の連絡や組織などは絶えてなかったのである。

森安氏の筆者に対する批判にもどるが、筆者が、森安氏のいうように、シルクロードをくりかえしとりあげるマスコミや出版社の風潮、さらにシルクロードを愛好する読者たちの姿勢を「非難」したことが一度でもあるであろうか。もし筆者の書いたものの中にそのようなものがあるのなら、森安氏はそれを明確に示す責務があるであろう。

筆者は、「シルクロード」が、地域を指す言葉としてはあまりにも曖昧な言葉であるため、研究者が地域を指す言葉として、この言葉を研究論文などで使うことには賛成することができない。また、この「シルクロード」という言葉が「あきらかに（西洋

の）一九世紀型の文明観や偏見を内包している」（杉山正明「中央ユーラシアの歴史構図―世界史をつないだもの」『岩波講座世界歴史一一』一九九七年、八一ページ）言葉である以上、『シルクロードと唐帝国』の中で「西洋中心史観の打倒」を声高に叫ぶ森安氏が、一九世紀のドイツ、つまり一九世紀の西洋で誕生し、ドイツの地理学者リヒトホーフェンF. von Richthofenが普及させたこの言葉（保柳睦美『シルク・ロード地帯の自然と変遷〔修正版〕』古今書院、一九八一年、一〇ページ参照。ドイツ語では「ザイデン・シュトラーセン」）を特に吟味・検討することもなく、そのまま使用しているのは、実に奇妙なことだといわざるをえない。

しかし、マスコミや出版社、それに旅行社などが、それぞれの目的に応じて、一般に親しまれたこのシルクロードという言葉を使うのは自由である。筆者自身、これまでにシルクロードを愛好する一般の人々を対象に、シルクロードの名を冠した講演を何度も行っている。「非難」すべき相手を対象に、そのような講演などするであろうか。森安氏の批判は、これまた事実に相違する一方的なものというべきである。

森安氏の批判の後半部に移るが、筆者は「シルク・ロードが……東西貿易の幹線路」であると書き、ソグド人の国際的な商人としての活躍についても記述した。はたして筆者はシルクロードによる「東西」貿易やシルクロード商人の意義を「ほとんど認めようとしな」かったであろうか。そのようなことは一度もない。ただ、筆者はその意義を「過大視すること」には問題があり、過大視するのは「行き過ぎであろう」と述べているのである。森安氏の記述は、この点でも筆者の考えを正しく伝えていない。なおこの点は「シルクロード史観」に関わる最も重要な論点であるので、後に三で改めて触れたい。

要するに、森安氏の筆者に対する以上のような批判は、学問的な批判というよりも、筆者の考えを曲解した、きわめて一方的な内容のものである。『シルクロードと唐帝国』のように一般読者を対象にした書物では、このような曲解に基づく一方的な批判は特に慎むべきものと思う。なぜならば、一般読者は記述の当否を判断する材料を持たないため、書かれたことをそのまま事実として受け取るのが通常であるからである。

二

森安氏は中央アジア史の時代区分の問題に関連して、筆者が中央アジアの「イスラム化」を強調するのは疑問であるという（八一―八二ページ）。そして「中央アジア史全体を見渡す時、イス

ラム化を強調しすぎると」問題が生じると述べている（八三ページ）。ここでは、森安氏のこの一連の記述に関連して筆者の考えを述べたい。

いうまでもなく、筆者らの「中央アジア」は、現在、ウズベク人、カザフ人、ウイグル人などのテュルク人イスラーム教徒が住民の大多数を占める「テュルク・イスラーム世界」である。筆者らの歴史研究の最大の関心は、中央アジアに、このような世界が、いつ頃、いかにして形成され、その後、どのように発展して現代を迎えたか、またその中にどのような社会が形成され、どのような文化が育まれてきたかといった問題である。筆者らの中央アジア史研究は現代の中央アジアを歴史的に理解するために行われる。現代にまで連なるこの「テュルク・イスラーム世界」を歴史的に解明しようとすれば、テュルク化やイスラーム化、さらにこの世界におけるイスラームの諸相の歴史学的検討がきわめて重要な課題となることはあまりにも明白であろう。

森安氏は、新疆ウイグル自治区などのテュルク・イスラーム世界を研究対象としているにもかかわらず、氏の専攻がイスラーム化以前の、仏教徒やマニ教徒が活躍した時代・地域であるためもあってか、氏のイスラームについての関心は薄く、氏のイスラーム化以降の時代に関する知識も十分とは思われない。そのため、中央アジアのイスラーム化を問題にする場合にも、「東トルキスタン全体が完全にトルコ・イスラム世界となるのは、モンゴル帝国が滅びた後、一五世紀からにすぎない」（八二ページ）という理由をあげて、中央アジアのテュルク・イスラーム時代の発端を九・一〇世紀とする筆者の考えを、「イスラム中心主義」であるとか「（早くイスラーム化した）西トルキスタンの視点からしか中央アジアを見ていない」（八二ページ）などといって批判するのである。

しかし、現在、中央アジアの「テュルク・イスラーム世界」が「イスラーム世界」（ただし、この「イスラーム世界」という用語の含む問題点については、羽田正『イスラーム世界の創造』、東京大学出版会、二〇〇五年、および濱田正美「湖南・樸学・「内」と「外」」『史林』八九-一、二〇〇六年などを参照されたい）の一部である以上、この世界の歴史を理解するためには、むしろ氏のいう「イスラム中心主義」で研究を進めるべきだと筆者は考えている。なぜならイスラームは、仏教などとは異なって、住民の信仰生活のみならず、税制、契約、裁判、婚姻など、住民のすべての日常生活を規制するトータルなシステムであり、そしてこのイスラームは現在も中央アジアで生き続けているシステムであるからである。そうである以上、「テュルク・イスラーム世

界」としての中央アジアを歴史学の研究対象とする場合には、イスラームに関わる諸問題を中心に研究を進めるのは当然のことであろう。そしてそれを「イスラム中心主義」などと呼んで批判するのは誤りというべきものと筆者は考える。

また、中央アジアのイスラーム化を考える場合に、「西トルキスタンの視点からしか中央アジアを見ていない」（八二ページ）と批判するが、東トルキスタンのイスラーム化はすでに九・一〇世紀に、東トルキスタン西部、すなわちカシュガルを中心とする一帯で始まり、はやくも一一世紀には、この地の出身者であるテュルク人イスラーム教徒によって、アラビア文字で写されたテュルク語をアラビア語で解説した世界最古の『テュルク語辞典』や、やはりアラビア文字による世界最古のテュルク語文学作品『幸福になるために必要な知識』が著されている。東トルキスタン西部では、このように、すでに一一世紀にイスラームに関わる重要な文化現象が起こっている。つまり、東トルキスタン西部のイスラーム世界は、すでに一一世紀に、アラビア文字を使用したテュルク語の辞書や文学作品を生むほどに、文化的にも成熟していたのである。この成熟期に直接先立つ九・一〇世紀、つまりテュルク人による最初のイスラーム国家カラ・ハーン朝の成立期をもって、西トルキスタンのみならず、東トルキスタンをも含む中央アジアのテュルク・イスラーム時代の発端と見ることに何の問題があるであろうか。

なお、確かに、森安氏のいうように東トルキスタン東部のトルファン地方のイスラーム化は、モンゴル帝国崩壊後の一五世紀までずれ込んだ。しかし、この地方は、ベゼクリク石窟寺院の壁画が示すごとく仏教等の伝統が強く、またアスターナ古墳群の遺物が示す如く、漢人や漢文化が深く浸透した地域であった。この地方は、七世紀以来、西から東へと波及するイスラーム化の波の、まさに東のはずれに位置した。この位置とこの地の文化的伝統の根強さを考えれば、この地域を、中央アジアの中でもイスラーム化の特に遅れた特殊な地域と見なすべきである。森安氏の中央アジア史についての見解は、この例からも分かるように、氏の専門領域がこの地域（トルファン地方）であることもあって、トゥルファン地方という、中央アジア全体から見ればいわば特殊な地域からの視点で構築されたものといえよう。しかし特殊な地域は、やはりあくまでも特殊な地域として扱うのが適切であると考える。

つまり筆者の中央アジアのイスラーム化についての考えは、けっして「西トルキスタンからの視点」から構築されたものではなく、東トルキスタン西部に見られたためざましいイスラーム化の現象をも視野に入れて構築されたものである。またこのような筆者

の考えはすでに学界では常識とされている考えである。その意味で森安氏の批判は、特殊な地域に視座を置いた、客観性に欠ける一方的なものといわざるをえないであろう。

なお、森安氏は「西トルキスタンからの視点」というが、「西トルキスタン」出身のソグド人の活動を扱った森安氏は「西トルキスタン」にも、より深いまなざしを注ぐべきであったと考える。ソグド人の故郷である西トルキスタンの中心地ソグディアナ地方は、中国の唐代にあたる七世紀以降、じょじょにイスラーム化した。そして九世紀にはイラン人によるイスラーム国家サーマーン朝の中心地となり、やがてこの王朝の宮廷を中心に特色あるイラン・イスラーム文化や独自のテュルク人奴隷軍人の制度を生んだ。この時代に、この地方が世界史の中で果たした役割はきわめて大きい。

しかし、『シルクロードと唐帝国』では、七―一〇世紀に進展したソグド人のイスラーム化やこの間のソグディアナの政治的・社会的・文化的諸状況についてはほとんど触れられていない。ソグディアナの外でのソグド人の隊商活動のみが大々的に取り上げられているのである。森安氏は、筆者らが三〇年前に批判し、すでに学界では克服されたはずの、《対外交渉史に重点を置き、中央アジア内部の史的状況の解明に重点を置かない研究視角》、つまり中央アジア内部の、中央アジア独自の問題を等閑視した交渉史的な研究視角を、今回の書物によって再生産しているといわざるをえない。

森安氏が、三〇年前に優勢であったこのような古い研究視角を取るのは、氏が、中央アジアで、中央アジアのイスラーム教徒たちがアラビア語、ペルシア語、それにチャガタイ・テュルク語などで残したイスラーム史料を原典によって十分に利用することができないためではなかろうか。ブハーラはサマルカンドとともにソグディアナの中心的オアシス都市の一つであった。イスラーム進出期前後のブハーラの諸状況、つまりソグディアナにおけるソグド人たちの諸状況については、ナルシャヒーという人物がアラビア語で著した『ブハーラ史』と呼ばれる歴史書のペルシア語版が残されている。これには研究者であれば誰でも容易に利用できる優れた英訳本（R. N. Frye, *The History of Bukhara*, Cambridge, Massachusetts, 1954）もある。森安氏がこの重要なイスラーム史料をもし少しでも利用していれば、当該期のソグド人やソグディアナの内情について、より多くを語ることが出来たはずである。

『中央アジアの歴史』刊行後の三〇年間に、日本のイスラーム研究は飛躍的な発展を見せた。日本の学界ではイスラームについ

ての知識も深まり、イスラーム史料の研究状況も大きく変わった。森安氏は、このイスラーム研究の進展とその研究成果に注意を払い、イスラームが中央アジア史上に持つ重大な意義についても、正しい認識を持つ必要があるのではなかろうか。そして「イスラム中心主義」などという言葉を使う自らの狭い視野と古い姿勢をただちに改める必要があると筆者は考える。

三

以上、筆者に対する森安氏の批判を中心に、これに対する当事者としての考えを述べた。森安氏の批判が筆者の考えを曲解した一方的なもので、とうてい受け入れることのできないものであることはもはや明らかであろう。しかし、森安氏の筆者に対する批判は別にして、筆者が三〇年前に、当時の若手研究者らの研究動向を背景に、松田壽男氏の「シルクロード史観」に疑問を投げかけたことはまぎれもない事実である。では、この「シルクロード史観」のどういう点が問題なのか。そして、現在、筆者が「シルクロード史観論争」についてどのように考えているかを述べておくことも意味があることであろう。

まず論を進める前に、筆者のいう松田氏の「シルクロード史観」とはどのような考えを指すのかを明確にしておきたい。筆者が「シルクロード史観」と呼ぶものは、松田氏の次のような考えを指す。以下に、筆者の「シルクロード史観」に関する記述を、間野英二「トルキスタン」（島田虔次他編『アジア歴史研究入門』四、同朋舎、一九八四年、四七-四八ページ）から引用する。

独創的な研究者であり、明快な文章家でもあった松田のオアシス都市の性格に関する理論をその最近の著『砂漠の文化』（中公新書、一九六六年；『松田壽男著作集』一、六興出版、一九八六年に再録）にもとづいて要約すれば以下の如くになるであろう。

《中央アジアのオアシス都市の発展は隊商の往来に負い、隊商活動のみがオアシス都市に活気をふきこんだ。オアシスの農業はもはや隊商たちの弁当づくり、隊商活動の裏づけといった二次的な意義しか持たない。

オアシス都市を結ぶ隊商路（シルクロード）がオアシス都市の死命を制し、オアシス都市の繁栄は農事よりむしろその市場や宿駅としての性格、商業国家としての性格の中に求められた》。

すなわち松田の理論によれば、隊商路としてのシルクロードの存在が、中央アジアのオアシス都市の死命を制するものであり、シルクロードの存在なくして、オアシス都市の繁栄

はありえない。換言すれば、シルクロードの存在が中央アジアそのものの死命をも制するものと解され、一五世紀末に始まる海路による東西貿易の発達は、それまでシルクロードを通じて行われていた隊商貿易を「ローカル化」し、かくして中央アジアは「救いようのない敗頽のなかに沈滞」していったと説かれるのである。

以上が「トルキスタン」（一九八四年）からの引用である。この松田氏の理論に対し、筆者は、先にも触れたごとく、『中央アジアの歴史』の中で「オアシス都市の商人たちの活動の意義を、あまりに過大視することには問題があり」、「中央アジアの諸オアシス都市を、もっぱら商業都市、隊商基地と規定することは行き過ぎであろう。やはりオアシス都市の基本的な経済は、何よりも農業に依存していたと考えるべきであろう」と批判したのである。

松田氏の四〇年以上も前に出されたこの理論は、今回の森安氏の著書でほとんどそのまま踏襲されている。従って、ここでは、森安氏の記述を特に取り上げる必要はなく、松田氏のこの理論についての、現時点での筆者の考えを述べれば十分であろう。ただ森安氏が、「シルクロード史観」に関連して筆者の研究の不十分さを批判した部分もあるので、それについては、後に適当な箇所で筆者の考えを述べるつもりである。

松田氏と筆者の考えで最も異なる点は、中央アジアのオアシス都市の基本的性格をどのように考えるかという点である。つまり、オアシス都市の経済を基本的に支えていたものを、農業と見るか、シルクロードを利用した商業（隊商貿易）と見るかという点である。筆者は以前には「オアシス都市の基本的な経済は、何よりも農業に依存していたと考えるべきであろう」と書いたが、現在では農業に、鉱業や織物業などをも加えるべきであったと考えている。

要するに検討すべきは、オアシスの民の経済を基本的に支えていたものを、農業などの産業と見るか、隊商貿易と見るかという問題である。森安氏のいうように、どちらかの意義を認めるか、認めないかという、二者択一的な問題ではなく、あくまでも、どちらがより基本的で、どちらがより重要であったか、という比較の問題なのである。

結論的にいって、この問題についてはこの三〇年間に研究はそれほど進んでおらず、残念ながらなお決定的なことはいえない。ただ、以下に紹介する最近の研究も、筆者の三〇年前の見解と同様に、中央アジアのオアシス社会における農業の重要性を指摘している。

まず、一六世紀以降の中央アジア史（この場合は西トルキスタ

ン史）を、環境論などをも含む新しい視角から論じたアメリカのマクチェスニー R.D.McChesney の優れた研究『中央アジア』（*Central Asia: Foundations of Change*, Princeton, 1996）も、「中央アジアの富は歴史的に見て農業に基礎を置いていた」（四一ページ）としており、大航海時代以降の国際交易にあっても、中央アジアは農業生産物である綿花や煙草を通じて世界経済と密接につながっていたと述べている。また、宇山智彦編の『中央アジアを知るための六〇章』（明石書店、二〇〇三年、九七ページ）によると、現代のウズベキスタンでも、その住民である「ウズベク民族」を「現在のウズベキスタンの領域で歴史的に人工的灌漑農業生産を行ってきた定住民」と規定するのが国家の公式見解であるという。このように、ソグド人の故郷ウズベキスタンですら、その地の住民の基本的生業が歴史的に農業であったと見なしているのである。また、隊商貿易を強調する森安氏ですら、「農業を生活基盤とするオアシス社会」（七六ページ）とか「（ソグディアナの）都市国家の経済基盤は農業であ（る）」（九三ページ）と書かざるをえなかった。中央アジアのオアシス都市の基本的経済が農業に依存していたと見るのは、やはり極めて自然な考え方なのである。

なお、松田氏は中央アジアのオアシスにおける農業と隊商貿易の関係について、『中央アジア史』（アテネ文庫、弘文堂、一九五五年、三三ページ、三五-三六ページ；『松田壽男著作集』一、六興出版、一九八六年に再録）の中で、

> オアシスそのものは砂漠や荒地でかこまれた島と見たてられるだけに、面積が限られているし、そのうえ耕作に必要な水にも限度がある。

と書き、さらに

> もともと耕地も少なく、それだけではとうてい発展の見込みもないようなオアシスのことであるから、いかに最初は農業を立前として発足したにせよ、やがては食糧の生産はオアシス生活や隊商の活動をまかなう意味しかもたなくなり、オアシス全体が中継商業を本意とするかまえに移りかわってくる。……いままで農民からの収税でまかなっていた国の政治も、だんだんと隊商の利益によりかかってゆく。こうして発展したオアシス国は、もはや農業国というよりも商業国家と呼ばなければならないであろう。だから、歴史の上に活躍したトゥルキスタンのオアシス国は、農業を土台とした商業国家と認めなければならないし、その活動が主として中継貿易にあったことは、くりかえして述べるまでもなかろう。

と書いている。つまり、松田氏もオアシスにおいては、もともと

農業が基本的生業であったことは認めてはいるものの、ただ、オアシスが「耕地も少なく、それだけではとうてい発展の見込みもない」ため、隊商活動が盛んとなり、農業は商人たちの隊商活動を支える副次的な地位へと転落していったと考えるのである。なお、森安氏もこれとまったく同じことを述べている（九三ページ）。

しかし、中央アジアのオアシスは狭く、従って耕地も少ないといえるのであろうか。松田氏の理論構築の基盤となっているこの問題について、筆者は、間野英二、中見立夫、堀直、小松久男『内陸アジア』（地域からの世界史六、朝日新聞社、一九九二年）の「総論」の中で、松田氏の理論が中国人の残した漢文史料の記述を基に構築されたものであることを指摘した後、

広大な大地に暮らす中国人の眼には、オアシスは確かに狭く、小さく見えたであろう。しかし、小さな島国に暮らすわれわれの眼には、巨大と映るオアシスもまた多い。松田の理論には、このような資料面での根源的な問題があり、その理論の当否は、今後も現地資料によって多面的かつ継続的に検証されてゆく必要があるであろう。

と述べた。

いうまでもなくオアシス都市サマルカンドを中心とするソグディアナ地方は国際貿易に活躍したソグド商人の故郷である。もし松田氏の理論が正しいとすると、ソグディアナでは、耕地も少なく、水も得にくく、そこでの農業生産には限りがあったため、ソグド人は隊商貿易に乗り出したとしなければならない。しかし、現地を訪れてみれば分かるように、ソグディアナ地方のサマルカンドやブハーラは広大なオアシスである。筆者は、先の『内陸アジア』（四八―四九ページ）で次のように書いている。

サマルカンドは、パミール高原の雪解け水を集めて西流するザラフシャーン川流域に発達した、砂漠の中のオアシス都市である。古来、ザラフシャーン川流域の住民たちは、この川の本流、支流から、無数ともいうべき多くの灌漑水路を引き、その水を巧みに利用して砂漠に多数のオアシスを造営した。その結果、ザラフシャーン川流域一帯は、中央アジアでも他に例を見ないオアシスの密集地帯となり、上空から眺めれば、あたかも白い砂の上におかれた一本の緑のベルトのような景観を見せた。この緑のベルトは、ティムール帝国の創設者ティムールの目にも、誇るべき「三〇ユガチ（約一八〇キロメートル）にもおよぶ一つの庭園」（バーブル）とまで映ったという。

この緑のベルトを構成するオアシスの大半は、人口二〇〇

―二〇〇〇程度の中小の農村オアシスである。そこではブドウ、メロン、リンゴ、ザクロなどの果実やキュウリ、ネギ、タマネギなどの野菜、それに小麦、棉花、キビなどが栽培され、それらは、定期市のたつ日に近隣の比較的大きなオアシスの市場（バザール）へと運ばれた。……緑のベルトを構成した農村オアシスの農地や果樹園、水車小屋、製粉所、それに市場の店舗や倉庫も、多くの場合、サマルカンドや、同じザラフシャーン河畔のブハーラといったオアシス都市に住む有力者たち、すなわち王侯、貴族、軍人、大商人、宗教関係者らの所有物であった。その結果、農村地帯の富は、租税、小作料、賃貸料などのさまざまな形をとって都市に流入する仕組みになっていた。

つまり、砂漠の中にあっても、灌漑がゆきとどき、緑豊かな土地（市街地や農地）がまるで一本の緑のベルトのように続くこのソグディアナの例を見ると、中央アジアのオアシスは狭く、耕地も少ないため、その状況を打開するため隊商貿易が発達したとは簡単にはいえないのである。

ソグド商人の国際的な活躍は紛れもない事実である。しかし、ソグド商人以外の中央アジアのオアシス都市の住民の商人としての国際的な活躍はほとんど知られていない。たとえば、東トルキスタンの有名なオアシス都市を例にすれば、カシュガルにしても、ホタンにしても、あるいはクチャにしても、これらのオアシス都市の商人の、ソグド人のような国際的な活躍は知られていないのである。つまり、筆者が三〇年前に『中央アジアの歴史』に書いたように、「ソグド人たちの商人としての活動にあまりに眼をうばわれて、ソグド地方を中心とする中央アジアの諸オアシス都市を、もっぱら商業都市、隊商基地と規定することは行き過ぎであろう」と現在もいわざるを得ないのである。

先に紹介したマクチェスニーの研究や、中央アジアを本拠としたイスラーム神秘主義教団ナクシュバンディー派が所有した莫大な財産を検討したロシアのチェホヴィッチの研究『一五・一六世紀サマルカンド文書』（О.Д. Чехович, *Самаркандские документы XV-XVI вв*, Москва, 1974）などからも明らかなように、ティムール帝国期を含む一五世紀以降の西トルキスタンの経済は基本的に農業に依存していたと見ることが出来る。筆者はこの確実な研究成果を基礎に、史料の少ない過去の状況をも類推する他はないと考えている。森安氏は「近代（森安氏の場合、一六・一七世紀以降）の東西トルキスタン住民の大多数は農民となった」（七八ページ）といい、一六・一七世紀以降、商人が農民に転化した印象を与える表現をするが、近代以降も、商人の隊商

活動は氏も認めるように中央アジアでなお続けられていた。問題は、中央アジアの経済の中で農業などの産業と隊商活動のどちらの比重がより重かったかという問題なのである。筆者は、近代に限らず、近代以前も中央アジアの経済が基本的に農民によって支えられていたと考えるのが、現時点でも妥当であると考えている。

しかし、中央アジアにはソグド人の如く国際的な通商活動に従事した人々もいたことは事実である。ソグド人の問題は極めて興味深い問題であり、日本でも羽田亨氏以来、古くから多くの研究者がこのソグド人の問題を研究テーマに取り上げてきた。また近年は、中国国内における豪華なソグド人墓地の相次ぐ発掘によって、ソグド人はあらためて学界の大きな注目を浴びている。さらにソグド人の武人的な性格に注目した研究すらも現れている。しかし、このソグド人についてはなお不明なことがあまりにも多い。

まず、ソグド人がなぜ国際的な隊商貿易に乗り出したのかという、もっとも基本的な問題である。ソグディアナの肥沃さ・広さを考えると、この問題の解答に、オアシスの狭さを基軸とした松田氏の理論をそのまま適用することはできないであろう。そうであるとすれば、何か別の理由を探さなければならない。ソグディアナが国際貿易路の十字路上の交差点に位置していたという地理的理由は、理由の一つとしては納得できても、理由の全てとは見なせないであろう。また農業などの産業ではまかない切れぬほどの人口の上昇が、ソグディアナから外の世界に雄飛するソグド商人を生んだとする推論も可能ではあろう。松田氏もオアシスの「余剰人口」と隊商活動とを結びつけて説明している（前掲『砂漠の文化』、中公新書、七三ページ）。森安氏もこの松田氏の考えを踏襲している（九三ページ）。しかし、例えば前近代のサマルカンドの人口を正確に知るすべもなく、いわんや人口のある時期の上昇を証明する手だてもない。一五世紀のティムール帝国の時代、ソグディアナの中心都市サマルカンドは郊外を含めれば三〇—四〇万の人口を擁したと推定される。換言すれば、ソグディアナの中心都市は、戦利品、農業、織物業、製紙業、商業などによってこれだけ多数の人口を養い得たのである。この数字を念頭に置くと、より古い時代のソグディアナで、どれほどの、何を契機とする人口の上昇が、外地に赴く商人を生み出すことになったのかという疑問も生まれてくる。結局、このもっとも基本的な問題はさらに検討が必要という他はない。

次に、ソグド商人が中国などの各地で集積した富が、商人らによってソグディアナ本地にもたらされたのか、また、もしもたらされたとすればそれらの富がソグディアナの経済にどれほどの影響を与えたかという問題がある。つまり外地で得られた富の本地

への環流のシステムが恒常的にあったか否かの問題である。この問題もなお明らかではない。ソグディアナのアフラーシアーブやペンジケントから出土した鮮やかな壁画から推定されるように、七～八世紀のソグディアナの都市は確かに富んでいた。しかし、その富の主たる源泉が、農業を中心とする産業であったのか、それとも隊商活動であったのかは、実は現在のところ明確には何もいえない。森安氏は、ソグディアナが「ただ国際貿易でのみ栄えた」と断言してはばからない（七二ページ）。従って、森安氏の場合、ソグディアナの壁画も、ソグド商人の富がその作成を可能にしたと信じて疑わないのである。しかし、その証拠は実はほとんど何もない。その上、現在までに発掘されたソグディアナの壁画に描かれているのは、貴族的・騎士的な社会であっても、大商人が活躍する商人的な社会ではない。ペンジケントの壁画にも、商人らしき人物はわずか一場面に登場するのみである。その上、別の壁画には穀物納入の様子を描いた場面すら存在するのである（吉田豊「中央アジアオアシス定住民の社会と文化」間野英二編『中央アジア史』、同朋舎、一九九九年、四九ページ）。このように、華麗な壁画の制作を可能にした富の源泉が何であったかという問題も、なお未解決というべきである。

さらに、ソグディアナにおける商人の地位の問題がある。森安氏は「商人の地位の高さは……ソグド社会のきわだった特徴となっている」（一〇五ページ）というが、もしもムグ山文書中の一ソグド語書簡に見える、フェルガーナ地方の都市ホジャンドの住民構成についての簡単な記述がその根拠だとすると、それはなおきわめて薄弱というべきであろう。そもそも、ホジャンドをソグディアナに含めてよいであろうか。商人の地位については、フランスの若手研究者ド・ラ・ヴェシェールの「現在利用できる資料による限り、ソグディアナの社会階層の中での商人たちの正確な地位については、われわれには何も分からないのである」という記述（Étienne De la Vaissière, translated by James Ward, *Sogdian Traders. A History*, Leiden-Boston, 2005, p. 164）が現時点では最も客観性に富む記述であると筆者は考えている。つまり、ソグディアナにおける商人の地位の問題はなお今後に残された課題の一つである。

さらに、ソグド商人の隊商の規模や隊商往来の頻度の問題がある。松田氏の考えを踏襲した森安氏の記述（七八ページ、一〇三―一〇四ページなど）を読むと、大規模なソグド人のキャラバン（隊商）がぞくぞくと頻繁にシルクロードを往来し、それらのキャラバンが通行税、宿泊費、食費、物品購入費や修理費などの様々な形で、シルクロード上のオアシス都市に次々と財貨を落と

していくため、これらの都市は経済的に潤ったはずだとされている。もし事実そうであるなら、確かに「キャラヴァンの通過・滞在によってローカルな経済も刺激され」（七八ページ）「地元経済も活性化する」（一〇四ページ）はずである。しかし、隊商の規模については、四〇〇人、二四〇人、数十人、四人などとする断片的な記録はあるにはあるが（吉田豊「ソグド語資料から見たソグド人の活動」『岩波講座世界歴史一一』一九九七年、二八四ページ）、正確なことはまだ何もいえない。また、隊商往来の頻度となると、どの程度であったかは見当もつかない。通行税、宿泊費、食費、物品購入費や修理費についても、それらについての具体的な情報はほとんど何もないのである。

松田氏の理論を踏襲した森安氏のこの地元経済活性化説は、シルクロードを利用したソグド人の隊商貿易が、大規模で、しかも頻繁に行われたという架空の前提の上に築かれている。つまり、松田氏、そして森安氏のこの説は、現在の史料状況を考えると、根拠の薄弱な、砂上の楼閣にしか過ぎない。そうである以上、森安氏自身の文章にも見える「トゥルファン・敦煌出土の世俗文書に見えるソグド人の大半は農民や職人や兵士であって、商人の姿はそれほど目立たない」（一〇三ページ）という事実、そして「中央アジア出土文書に見えるほとんどの住民はシルクロード貿易と関係なく農業をやっているようにみえる」（同上）という事実を、やはり意味のある情報として、より重く受け止める必要があるのではなかろうか。学問的な議論にはやはり証拠が必要である。森安氏のごとく「一般的にいって商人の商行為や貿易に関わる記録が、公的に著録され保存されたり、後世にまで伝わるのは稀有に属する」（七〇ページ）などといって、商人の商行為や貿易活動については証拠がないのは当然であるかのごとく述べるのは、一一―一二世紀を中心に、カイロ（フスタート）のユダヤ商人が残した、商人の商行為や国際貿易に関わる一万点にものぼる膨大な「ゲニザ文書」の例をあげるまでもなく、きわめて不適切というべきである。歴史研究者は、極力思いこみを避け、あくまでも確実な史料、確実な証拠に基づいて自らの理論を構築しなければならないと考える。

なお、商人の問題に関連して、筆者が「中央アジア史とシルクロード――シルクロード史観との訣別――」の中で、ウイグル文書に登場するのはほとんどが農民で、隊商貿易に従事するという商人の姿をそこに見いだすことができないとした点について、森安氏は、これまでにも、そして今回の書物でも「事実誤認」として批判している（七四―七五ページ）。この批判は当たっているので、そのまま受け入れたい。

ただ、若干付け加えるならば、筆者がこのエッセイを執筆した三〇年前にはウイグル文書の研究がなお未発達で、手元にはウイグル文書中での商人の存在を示す史料や研究文献が見あたらなかった。森安氏が言及する一九七六年にドイツで発表されたP・ツイーメの論文も、このエッセイを執筆中の一九七七年にはなお手元には到着しておらず、また、商人の書いたウイグル語の手紙文などをも扱ったフランスのJ・ハミルトンの研究が出版されたのは、それより九年後の一九八六年であった。森安氏が、ハミルトンの研究内容について、その概要を前もって日本語で紹介したのも一九八五年のことである。一九七七年以後、研究がじょじょに発達し、ウイグル文献中の商人の存在についても語ることが出来るようになったのである。筆者の「事実誤認」はこのような当時の研究状況の反映にすぎないのであり、今後はこの新しい研究状況を出発点として、また思考を巡らせばよいのである。

それ故、ここでは、このハミルトンらの研究をも視野に入れてあらためて考えてみると、結論は簡単である。ウイグル文書中に、隊商に従事する商人やそれらの商人に商品を託す僧侶、貴人、役人、軍人らが登場することは、オアシス都市にそのような商人がいたこと、またオアシス都市で商人による隊商活動が行われていたことを確かに証明する。しかし、それ以上でもそれ以下でもない。これらウイグル文書に見える商人たちの活動についての情報は断片的で、それらの商人たちの隊商活動がオアシス都市の経済の中でどの程度の重みを持っていたかという「シルクロード史観論争」に関わる問題については、実は何も明らかにしてはくれないのである。従って、これらのウイグル文書も「シルクロード史観論争」を解決するための有力な証拠とはなりえない。そうであれば、オアシス都市の経済は、基本的に、商業（隊商活動）よりも農業を中心とする産業によって支えられていたとする筆者の考えを改める必要もないのである。

おわりに

以上の一、二、三では森安氏の批判について筆者の考えを述べるとともに、筆者がかつて「シルクロード史観」と呼んだ松田壽男氏の理論を、現時点から再検討してみた。

まず、森安氏の批判については、その批判が、曲解に基づく一方的な批判であり、とうてい受け入れることのできないものであることを述べた。また、中央アジアにおけるイスラームの重要性について、森安氏に理解が不足していることを指摘した。さらに森安氏の記述の中に、根拠の確かでない記述がみられることをも指摘した。また、森安氏の中央アジア史に関する見解が、中央ア

ジアの東端に位置するトゥルファン地方という、中央アジア全体から見ればいわは特殊な地域からの視点で構築されたものであることを指摘した。そして、森安氏の批判の中で唯一受け入れることのできる、ウイグル文書中の商人の問題にしても、「シルクロード史観論争」を解決するための有力な証拠とはなりえないことを述べた。

次に、「シルクロード史観」の問題点については、少なくとも現時点では、三〇年前の筆者の考えを特に改める必要のないことをあらためて確認した。すなわち、中央アジアのオアシス都市の経済は、基本的には隊商活動よりも農業を中心とする産業により深く依存していたと考えざるをえないのである。ただ、この問題は完全に解決されたわけではなく、今後も種々の観点から検討を重ねる必要があるであろう。

なお、この機会に、筆者が『中央アジアの歴史』で、中央アジアを「シルクロードの世界」ではなく「草原とオアシスの世界」としてとらえ、その歴史をこの言葉（キー・ワード）を軸に描写した点について一言しておきたい。現時点で考えなおしてみると、中央アジアが「草原とオアシスの世界」であったのは前近代までであり、遊牧民が輝きを失った近現代（一九世紀以降）の中央アジアは、もはや「草原とオアシスの世界」と呼ぶには相応しくないことに気づくのである。

では、前近代までにしか適用できない「草原とオアシスの世界」という言葉にかわって、前近代と近現代とを包含する中央アジアの通時的な歴史的特徴を、端的に表現する何らかの言葉を見つけだすことができるであろうか。もし見つけだすことができれば、その言葉を軸に、中央アジアの真の通史をあらためて描くことができるのである。ただ、残念ながら、現在の筆者はなお適当な言葉を思いつくことができない。

では、もしそのような言葉を見つけることが困難であるとすれば、中央アジア史には、前近代と近現代との間に大きな断絶があると見るべきなのか。しかし、少なくともイスラーム社会という観点から見た場合、イスラーム化以降の中央アジアの前近代と近現代との間に断絶は見いだせない。一方、中央アジアが近現代に、異教徒の国、清やロシアの支配下に組み入れられ、その独立を失っていったという政治面を重視した場合、中央アジアの前近代と近現代の間には明らかに断絶と思われるものが見られなくもない。では、これらを総合的に視野に入れて考えた場合、中央アジア史の前近代と近現代との間の、断絶あるいは連続の問題をどう考えるべきなのか。現在の筆者はその解答を見いだせないでいる。それ故、中央アジアの近現代史の研究が急速に発達した現在、筆者

より若い世代の中央アジア史の研究者たち、特に近現代史の研究者たちによって、この問題についての納得できる解答が出されることを期待するものである。

このように、中央アジアの通史を、何を軸に描くべきかという根本的な問題をはじめ、中央アジア史にはなお不明の問題が多い。三〇年前に、筆者は、将来、中央アジアについての研究が進展した時、「中央アジアはその神秘のベールをぬいで、はじめて私たちの前に、その真の姿を現すであろう」と書いた。しかし、あの時からすでに三〇年の年月が流れたというのに、中央アジアはなお私たちの前にその真の姿を現してはいないのである。

A Reconsideration of Central Asian History Centered on the Silk-Road Theory, In Light of Takao Moriyasu's Criticism

by

MANO Eiji

In the 1960's a view of Central Asian history based on the Silk-Road theory maintained a dominant position in the academic world in Japan. Hisao Matsuda was the advocate of the theory and emphasized the importance of the Silk-Road, a conduit for cultural and material exchange between the East and the West, for the people of Central Asia. Matsuda argued that the economy of oasis cities in Central Asia depended heavily on the caravan-trade conducted along the Silk Road. According to Matsuda's theory, agriculture was only secondary in the region.

In the late 1970's *A History of Central Asia* by the author of this paper was published criticizing Matsuda's view. The author questioned whether the value of Silk Road for the people of Central Asia was truly so great. He argued that agriculture was more important than the caravan trade. The book gave rise to academic disputes in Japan. The disputes revolved around how the value of the Silk Road for the people in Central Asia should be estimated. The dispute never reached a conclusion, but this author's view seems to have gained the upper hand in the intervening thirty years. However, Takao Moriyasu's *The Silk-Road and the Tang-Dynasty,* which appeared in 2007, severely criticized the views of this author. Moriyasu appears to wish to revive Matsuda's theory.

This paper counters Moriyasu's criticism from many points of view and reaffirms this author's earlier position.